

Z. バルビュールの歴史心理学

—その方法と問題—

永 井 邦 明

はじめに

本稿は、Z. バルビュールの歴史心理学理論の問題点を、彼の著書『歴史心理学の諸問題』(*Problems of Historical Psychology*, New York: Grove Press, Inc., 1960)を中心に検討するものである。バルビュールの歴史心理学理論は、丹念に著書を検討してゆくと、理論においても実証においても難かしい多くの問題を含んでいる。また歴史心理学自体が独立した学問としての歴史も浅く、さまざまな方法論的問題があると言わざるを得ない。本稿ではそのうち、(1)現代心理学と歴史性の問題、(2)歴史過程と心理現象の問題、(3)歴史心理学の目的と方法の問題、の三点に焦点を絞って、検討をすすめる。

I. 現代心理学と歴史性の問題

バルビュールの歴史心理学提唱は現代心理学諸理論にみられる「歴史性 (historicity) の考慮の欠如」に対する彼の厳しい批判に基づく。彼によれば、近代心理学の主要目的は、時間空間を抽象した次元において、人間の心理現象を記述し、説明するための概念を駆使した一般理論の構築ならびに行動の自然科学的、「数学的」モデルを構想することに他ならない。そこで求められているのは普遍的妥当性を有する心理学的概念の体系化であった。

ところが最近の人類学、社会心理学の貢献によって、近代心理学の諸概念が特定の社会—文化体系のうちでのみその妥当性を問題とすることができること

が明らかになった。たとえば、個人の行い、知覚、記憶、想像あるいは感情、態度、特定の精神構造などは、とりまく社会的空間 (social space) の中においてはじめて正しく理解されることがわかった。

それにもかかわらず、今日の心理学者達は、このような「心的現象にある社会的文化的相対性 (socio-cultural relativity of mental phenomena) が必然的に歴史的相対性 (historical relativity) を伴い、文化的に条件づけられた現象は同時にまた歴史的にも条件づけられていることを認めようとしないと、バルビューは批判している。

しかし心理的モデルを仮設するに際してこのような歴史的規定性 (以下これを歴史性変数と呼ぶことにする) を、その要因の一つとしてそこに導入することは、心理学的モデルを非常に複雑にすることになる。そこで今日の心理学では、たとえば、(1)心的現象への「シチュエイショナル」アプローチとも呼ぶべき方法をとるもの、あるいは(2)行動の「予測」を目ざす方法をとるものなどが、この問題を巧みに回避して問題を扱っている。(1)はたとえば、心理現象をその置かれているシチュエイションの一定数の構成要素によって定義し、説明するレヴィンの方法にみられる。ここでは人間の精神の次元のうち歴史的時間というものがない。主体の現在の行動決定場に対して有する過去の経験の意味としての要因は、極度に軽視されるか、無視される。(2)は歴史性変数を考慮しない人間の普遍的行動モデルを構想するものであり、その底に「心理現象が本質的に非歴史的である」という仮説をもっている。そこでは「具体的な時間の演ずる役割」は慎重に排除されている。

心的反応は、具体的環境から、つまり個人の精神の生きた体系 (living system) から引き離すことができ、ある特定の心的反応が一限りの反応、即ち歴史的な文脈における固有の意味をもつ反応としてではなく、何回起ってもその反応を斉一的で類似的なものとして取り扱われる。反応と反応の間の時間的経過に伴う人間の経験や人格の発達は起らないかのように取り扱われる。しかるにそれは事実と反する。人間の精神構造は本質的に社会的、文化的構造の一部であり、それはまた歴史的变化のえいぎょうをまぬがれることはできない。

以上がバルビュールの現代心理学批判の要旨であり、彼の歴史心理学提唱の土台ともなるところである。われわれもそこでこの批判のもつ意味を十分に受けとめて、自己の立場を再検討することから出発しなければならない。

バルビュールの現代心理学における歴史性の無視に対する批判は、たとえば初期の行動主義心理学をとって考えるとよく理解される。

従来社会科学一般において、自然科学的方法が用いられることは少なかった。ところが、社会科学に適用できるようになり、同時にまた社会科学自身も数学やその他の自然科学的方法を自己の分野で応用できるような形に変革し、独自の発展をも遂げた。心理学においては実験計画法が発達した。データの処理を厳密に規格的にし、外部的観測の可能な変数のみを取り扱う行動主義心理学が展開した。行動主義心理学では、実証を重視し、その客観性の確立を、人間行動を実験的に統制し、変数を分離し、変数間の関係を明らかにすることに求めた。それは必然的に社会現象を対象として取り扱うことを困難にさせた。なぜなら社会現象は相互連関過程のうちであり、特定数の変数を分離し、他の変数を統制することは厳密には不可能に近いからである。当然歴史性変数は省かれる運命にあった。行動主義心理学には歴史性変数は導入されるはずもなかったのである。

バルビュールはまた、現代心理学が、たとえばレヴィンの如きシチュエショナル・アプローチにおいて、人間精神にえいきょうを与える歴史的時間要因を考慮していないとも批判した。現代の実験社会心理学においても、今まで研究してきたことは、主として人間の心理的メカニズムにおける普遍妥当的法則を「徹視的」に解明することであったと言えよう。従ってそこでは非歴史的時間

1 しかし現代社会心理学では、社会心理現象の操作的研究を実験室内のみならず、野外事態で行なうことの可能性と必要性が次第に認められてきている。(Cf. L. Festinger, and D. Katz. (Eds). *Research methods in the behavioral science*. New York: Dryden, 1953. M. Sherif, and C. W. Sherif, *Reference groups*. New York: Harper, 1964. W. J. McGuire, "Theory-oriented research in natural settings: the best of both worlds for social psychology," *Interdisciplinary relationships in the social sciences*, ed. M. Sherif, and C. W. Sherif (Aldine Publishing Co., 1969), 21-51.

(即ち抽象的時間)は考慮されることはあったが、「巨視的」な時間¹や、個々の人間、集団、社会の歴史的特殊性は問題にしないのであった。つまり、求められたのは普遍的な人間行動や心的機能のメカニズムなのであって、その限りにおいて歴史性変数(即ち、心理現象の相対性なり、分析対象のもつ歴史的特殊性、個人差等々につながりをもつ要因)は考慮されないのは当然であった。

さらにまたバルビュールは、たとえばフロイトにみられるエディプス・コンプレックス概念の普遍的妥当性の主張を、人間精神の非歴史的性格を強調する概念であり、それはフィクシズムの態度のあらわれとして批判している。いうまでもなくエディプス・コンプレックスは口唇期、肛門期、男根期、性器期というリビドー発達の第三期男根期までは抑圧されずに表に出てくるものとされている。それは、社会、文化や時代に関係なく出てくるものとされ、フロイドは『トーテムとタブー』(1913)で、人類の宗教、道徳の原始形態の源泉に認められる罪責意識を、人類が原始においてこのエディプス・コンプレックスを身につけたためであると説いている²。しかしその所説と方法については人類学からも疑問、批判を投げられた。またフロムはエディプス・コンプレックスを生物学的、普遍的であるとせず、むしろ人間関係や社会の規定要因を考える。こうした意味でバルビュールの批判も正しいと言えることができるだろう。では、エディプス・コンプレックス概念は別として、フロイトの精神分析理論とバルビュールはどのようにつながるであろうか。

フロイトの理論は多岐に渡り、それ自体も変化、発展するがその基本的特徴の一つは、ヴントやクレペリンの静的、記述的概念に対し、単なる心理的事象の現象的叙述を排し、その因果関係に関心を向けたことにある。医学の診断と

1 ただし、クロス・カルチュラルな心理学的研究では、社会・文化の相違に基づく人間行動、パーソナリティの歴史的、文化的、社会的特殊性を実験的方法で分析することは多く行われているが、これは水平的視点に基づくのであり、バルビュールの主張するのは垂直的視点を持つべしとする点で相違がある。

2 S. フロイト「トーテムとタブー」、土井正徳訳『文化論』(日本教文社、© 1953)、p. 149-430。

Z. バルビュールの歴史心理学

同じく、現在の症状を過去の点験とのつながりで考察し、その起源をさぐることに関心が向けられた。つまり人間の精神現象をクロス・セクショナルな視点ではなく、歴史的、発達的にとらえようという傾向が精神分析学の方法の中にみられた。この点でバルビュールの言う人間の精神現象を垂直的方向でとらえる接近法とつながってくる。そこから心理学へ歴史を導入する一つの道が開かれる。

C. W. ミルズも社会科学における歴史の持つ重要な意義を強調している。

「歴史の利用もしくは心理学的事柄に対する歴史的感覚なくしては、社会学者は今や自己の道標となすべき問題について十分論ずることができない。」¹

ミルズはさらに現代アメリカ社会学についても、歴史の考察が欠除している点を指摘している。たとえばその批判対象の一つ、抽象的経験主義について、彼は次のようにのべる。

「認識論的ドグマのゆえに、一貫して非歴史的かつ無比較的 (a-historical and non-comparative) である。抽象的経験主義者は小規模な領域をとり扱い、心理学主義に傾斜している。」²

これは今日の心理学の一面にもあてはまる指摘であろう。現代心理学ではパーソナリティと文化の相互作用を前提にする。その意味で人間行動を理解する。人間の精神構造、パーソナリティを一元的決定論によってとらえることは避けられているとすることができる。その背景には、バルビュールの指摘するように、文化人類学、社会学の成果を取り入れたり、あるいは進んで生物学や生理学などの他の隣接諸科学との交流を求めたことがある。しかしなお今日の心理学の一つの重要な問題は、そこに見られる歴史性変数の相対化、つまり社会ないし歴史の構造、その発展を、人間行動の決定場 (determining field) における他の多くの心理的諸要因に並列される一つの要因として考慮することにあると見ることもできよう。

1 C. W. Mills, *The Sociological Imagination* (New York: Grove Press, Inc., ©1961), p. 143.

2 *Ibid.*, p. 68.

バルビューの批判をまつまでもなく、より根源的にさかのぼって考えれば、ある共同体の個々の成員の性格や、その精神構造、集合的情動性、さらには広く一国民のナショナル・キャラクターは、それぞれの歴史過程においてその社会、経済的關係〔生産力及び生産關係〕の変化とともに変容してゆくことは自明である。しかし同時に社会、経済關係だけでなく、文化風土や伝統の規定をそれらは受け、そこには文化発展の内在的論理が認められよう。『抽象と感情移入』におけるヴォリンガーの東西芸術（即ち文化）比較論はその例である。彼によれば、東西芸術の歴史的発展過程は世界感情の多様な発展過程に他ならない。この世界感情は「人間が宇宙に、即ち外界の諸々の現象に、当面してその都度見舞れる心理状態¹」であるが、これは東西諸民族の「絶対的芸術意欲」として現われる。ヴォリンガーは、この芸術的意欲と、その所産たる東西芸術様式との相互連関を、「感情移入——抽象」という心理的要求の両極と「自然主義——様式」という芸術的類型概念の論理で説明した。そして彼においては、この「感情移入——抽象」の衝動（要求）を規定するものは各々の民族に特有の文化的風土、一般的精神状態なのである。換言すれば、ヴォリンガーは、東西芸術の類型とその発展過程が、それを生み出した文化風土、一般的精神状態（バルビューの言う情動的風土）により一層基本的な規定を受けることを明らかにしている。つまりそこに社会、経済關係より以上の規定性をもつ文化発展の内在的論理を認めることが出来るのである。

また見田宗介はその社会意識構造分析において、社会意識を社会的気質、社会的能力、社会的性格の三つの側面からとらえている。そして、その社会社会能力、社会的性格の両側面は、生産力と生産關係との規定を比較的大きく受け、歴史的に変化、発展するものであるとする。これに対しその社会的気質的側面は、自然的風土との関連、民族的制約が比較的大きく、歴史的にも容易に変化しないと、巨視的に見ても人間の社会意識には非歴史的部分があること指摘²している。

1 W. ヴォリンガー著、草薙正夫訳『抽象と感情移入』（岩波書店、© 1953）、p. 30.

2 見田宗介『現代日本の精神構造』（弘文堂新社、1965）、p. 161.

以上をまとめると次のようになろう。人間の精神は歴史的規定から自由ではない。しかるに今日の心理学は、人間精神発達の歴史性を捨棄した抽象理論に関心を寄せている。人間の精神現象も根源的には社会構造、経済関係との規定関係にあるが、同時にそこには人間の心理現象、意識に対してより直接的規定関係にある文化風土、情動的風土の展開の内在的論理を認めることができるであろう。また社会意識も、社会構造、歴史過程との相互作用において、それぞれのレベルで、そのえいきょうを受けやすい面と、歴史の変化、発展に対して恒常的である面がある。従って、今後の研究においては、われわれがこうしたそれぞれの点を明らかにしてゆくことが人間精神の歴史的展開、つまり社会心理、社会意識の歴史的変容を把握する際に必要となってくるのである。

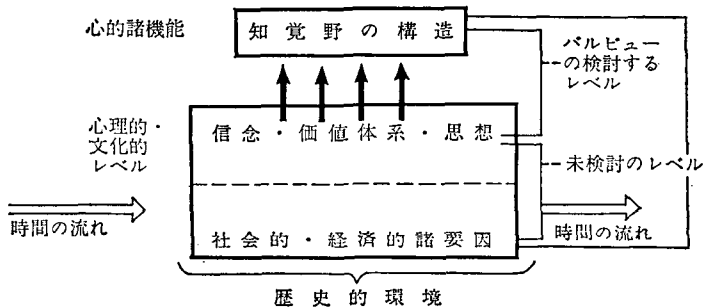
II. 歴史過程と心理現象の問題

歴史的事象とは何か。それは「文明の一事実 (un fait de civilisation)」であるとフェーブルが言う場合、彼は人々のコミュニティにみられる生活様式の変化を生んだ一連の事象を歴史的なものとして考えている。そしてこれらは政治的、経済的、文化的、心理的、物理的事象である。これに対し今日の歴史家にみられる伝統的見解では、「歴史的」ということは主として社会的内容を有するものとして考えられる。それは一定の時間内では人々のコミュニティの発展は、一般的にいつてその時の政治的、経済的あるいはまた社会的事象の反映であるという仮説に基づいている。そこから彼らの歴史研究は、人々のコミュニティの政治的、時には技術的な発達の研究を意味するものとなる。

バルビュールはフェーブルの考えをすすめて、伝統的な見解よりも包括的な意味をこの「歴史的」という概念の中に含ませる。つまり一つのコミュニティの歴史的環境には、そこにおける政治、経済、技術的条件に限らず、成員の価値、信念、思想、イデオロギーあるいはその集合的情動性をもこれに含めるのである。言い換えれば、従来ともすれば技術の発展に対して過去の心理—文化的事象を過少評価しがちであり、そこから思想、価値、信念の体系あるいは集合的情動状態が、社会的、経済的諸条件に依存しているとされ、またそこへ還元でき

るとされるような見解を生んだ。そのため、ある文明における人間精神の歴史的發展を系統的に考察することがなかったとバルビュールは指摘する。

このような問題意識にもとづいて、バルビュールは人間の知覚について具体的実証的研究を試みようとした。「個人の信念、価値体系はその人の知覚野を決定する要因である」ことを示すために、16世紀と19-20世紀のフランス人の知覚野の構造の差を、両者の信念、価値、思想の差異にむすびつけようとした。つまりここではバルビュールの検討のレベルは下図に示すように、〔知覚野の構造←思想、価値、信念体系〕に向けられている。



そこで理論的問題としてあらわれるのは、信念、価値体系、思想を複雑な歴史的環境から分離 (isolate) してしまうことにある。「分離」ということは、複雑な歴史的環境を構成する諸要因から、本質的要因を「抽出」し、理論的検討をより可能にする「理念型」を構成することを意味するものではない。むしろ錯綜した歴史的環境より信念、価値体系、思想を取り出してくる場合には、それが根底的な社会、経済的要因をどのように反映しているかという点の把握が必要とされるのである。また信念とか思想、あるいは芸術などは必ずしもその時代の民衆の歴史をそのままの形を映すものではなく、補償的形態、あるいは反動的形態をとることがあることも留意されねばならない。

ここにはもう一つバルビュール自身によって指摘されている問題がある。彼のアプローチは、歴史的發展のうちにみられる人間の心理現象と歴史現象の相互

Z. バルビュールの歴史心理学

のえいきょうの及ぼし合いという点の解明にあった。従って、彼が主観的にとり出してくる信念や価値の体系、思想が、果してこうした歴史発展の場における自律的要因であるかどうかということが、問題として残されるのである。

バルビュールが、人間精神は歴史的存在であり、心的機能もその例外でないとし、上述の考察を行ったが、次に彼は一步さらに進んで、心理現象と歴史現象の相互作用過程を「心理—社会サイクル」としてこれをとらえる。つまり、あるコミュニティの歴史的發展はその社会的諸条件と心理的状況の循環的相互作用によって推進される。その循環的相互作用はフィードバック効果を絶えず与えつつサイクルを描いて進行する。さらにその連続的運動は螺旋形的發展過程をたどる。

このような仮説に基づき、バルビュールは事例研究として、ヒットラーのパラノイド型パーソナリティとそれを生み出した社会状況、あるいはヒットラーによって組織された社会構造、そしてその展開としてのナチズム運動をとりあげ、そこに見られる心理現象と歴史現象の相互作用過程を説明してみせる。

こうして、歴史と心理の連関に「心理—社会サイクル」の概念を導入した点は、バルビュールの理論の最もすぐれた点であろう。

南博教授らも歴史と社会心理の研究について、社会心理を単なる社会状況の反映としてではなく、「社会的状況と心理的現象との相互作用の場」として社会心理をとらえなくては歴史への接近はできないとしている¹。

バルビュールはヒットラーのパーソナリティと社会的状況との関連の考察において、彼の歴史心理学理論の有効性を実際に示してくれている。従ってわれわれが日本の精神構造や、たとえばアルトラ・ナショナリズムとその指導者をこのような観点から考察することは十分可能である。また実際かなり有効であろうと思われる。バルビュールの理論は現段階では粗さが目立つが、今後これを十分精緻化し発展させることも可能である。ただこの「心理—社会サイクル」の考え方を誤ると、循環論に陥る危険性があることを自覚しておくべきであろう。

1 南博「社会心理史の課題と方法」社会心理研究所編『社会心理史』（誠信書房、1965）、p. 23.

バルビュールの歴史心理学は上述の点ですぐれているが、しかしもっと徹視的な社会状況と心理現象の相互連関の場における分析が全く不十分であることを指摘せざるを得ない。現実の事例研究にあたっては、特定の事象と歴史の中に生きる人間との出会いの構造、集合的情動状態の内容・強度のレベル、その集団の階層、職業、世代、その他の社会的諸特性のちがいによる情動状態の分布などの問題が詳細に解明されることが、今後の研究を進めるにあたって必要とされるのである。

III. 歴史心理学の目的と方法の問題

次にバルビュールの歴史心理学の目的とそこにある方法的問題をもう少し具体的に考察してみたいが、始めにまず、人間精神の発達の歴史を扱っている二、三の日本の学者の目的とアプローチをごく簡単に比較しておこう。

社会心理学の分野において、従来の心理学理論の歴史的考察の欠除を早くから問題とし、歴史的視座をもって社会心理に接近し、「民衆」の「社会心理史」を提唱したのは南博教授らである。その研究の目的と基本的姿勢は、生きた個々の「民衆」の心理・意識構造、行動様式の分析を媒介にし、社会、文化の状況を把握し、同時にこの両者の相互作用過程のうちから歴史のダイナミズムをさぐろうとするものである。¹

歴史への具体的アプローチとしては、二つの方法がそこで示されている。その第一は、社会心理史の対象を個々人に反映した社会的諸事象の「イメージ」とし、従ってその発掘にあたっては諸個人のもつイメージの歴史（心理史）の分析の反復によるデータの集積、整理を行うという方法である。その第二は、歴史的諸事象について「民衆」が抱く「共通の観念、意識群」を歴史的文脈において探究する方法である。そして現実には、この両者を具体的な研究の中で総合すべきことが示されている。

これに対し見田宗介がその精神構造論²で扱っているのは、トータルな概念と

1 *Ibid.*, pp. i-36.

2 見田宗介『現代日本の精神構造』（弘文堂新社、1965）

Z. バルビュールの歴史心理学

しての時代精神、民族精神の如き精神ではなく、その関心は歴史的社會がどのように諸個人の内面意識にえいきょうを与えるか、またそこに介在する媒介要因の布置連関がどうであるかに向けられている。その研究方法は日常の事象から選定された個別的データの背後にある意味連関をさぐることにより、人間をかこむ普遍的状況としての時代の本質的局面を把握しようとするものである¹。具体的には、現代民衆の「価値意識」の分析、その価値体系の内的連関を明らかにするという実証研究を行っているが、その分析は現代日本の社会意識構造をよく浮きぼりにしている。

以上の研究とは少々異って、社会の変革と進歩の原動力を開発するという究極の目標と問題意識を前提とするのは神島二郎²である。彼は身近にある生活の場としての「精神構造」を現実分析することにより、そこにある問題即ち現存秩序への順応の下意識的前提を明らかにし、あらたな生活の場(即ち精神構造)を構成し、現実の変革と再組織による進歩を目ざそうとする。歴史創造のエネルギーの開発を究極の目的とするのである。

彼の接近方法は、社会的現実を縦断的な歴史的諸段階と横断的な社会諸類型との両観点から、その相互作用連関を分析し、トータルな現実把握を行おうとするものである。

以上ごく簡単に紹介した日本の研究者達の問題設定、方法に対し、バルビュールは歴史と人間の精神の問題をどのようにとらえてゆこうとするのであろうか。それを次に考えてみたい。

バルビュールの主たる関心は、一定の文明の中での人間精神の歴史的発達に対して体系的な解釈を与えることではなく、精神生活を構成する要素の歴史性(historicity)の研究である。従って彼の言う歴史心理学の主要目的の一つは、ある集団の成員に持続的に維持された集団心理特性、心理傾向を形成せしめたところの歴史的起源としての特定の心理状況、つまり心理—歴史的焦点(psycho-historical foci)をその文明のうちにさぐり、明確にすることとなる。

1 *Ibid.*, pp. 1-2.

2 神島二郎『近代日本の精神構造』(岩波書店, 1961)

それではバルビュールの具体的研究はどのようなものであったのだろうか。彼の主な意図は「心理学と歴史を近づける」ことにあった。心理学的志向をもった歴史家、トックヴィル、ディルタイ、トインビー、マルク・ブロッホ、ルナン・フェーブルらの諸著作を参考にしつつ、「人間の精神はどのように、またどの程度、歴史過程からのえいきょうを受けるのか」という彼の中心的問題へ、社会学的あるいは心理学的手法をもって接近して行った。そして次の三点からこれを論じた。

1. 歴史的発展とさまざまな心的機能との関連
2. 歴史的発展と個人の精神構造との関連
3. 歴史的発展と集団の精神構造との関連

第一点については、彼は近代西欧社会の文化と個人の知覚野の変化の関連を例証しようと試みた。また第二点については、古代ギリシャにおいて顕著に歴史的発展をみた文化の枠組の内部における個人のパーソナリティの変化を明らかにし、第三点に関しては、英国人の国民性と、その特性の「歴史的起源」を特定の「心理—歴史的諸条件」のうちにさぐろうとした。

以上のようなバルビュールの事例研究における若干の方法的問題点をここで考えてみたい。

その一つはバルビュールが分析道具として用いた心理学的あるいは社会学的諸概念についてである。彼は精神分析学や社会学からの概念を借用した。従って、あらたにそれらの概念の相互関連、また新しく転用された場合にはその概念規定の厳密さが問題となってくる。しかし、バルビュールにおいては情動的風土にしろ、security, insecurity, social unrest にしろ、それらがどのような内容・構造的連関を有するのかが明確に定義されているとは言い難い。たとえば、security, insecurity, system of securityなどを考えるにあたって、その社会的諸特性と心理的諸特性がどのようなものであり、どのような内的相互関係を有するのかが明らかにされていない。その概念規定については、今後一属正確に、細かく、実証的分析が可能な概念となるまで検討してゆくべきであろう。

またバルビュールは、集合的情動状態のうちにinsecurityが生起されると、集

団は security を求め、そこでさまざまな集団行動、心理現象が発現するという仮定に基づいて、事例の分析を随所に行っている。しかしその際、security, insecurity の内容がそれぞれ歴史的に異っていることは明白である。ある時代のある集団の成員にとって insecurity である状況が、他の集団あるいは同じ集団でも時代が異なる場合においては、それが insecurity でない場合がある。また ambivalence の内容にしても、たとえば現代人にとって ambivalence を生起する二つの相反価値感情が、未開時代においては ambivalence とはならないこともある。それは未開人の思惟と現代人のそれとは大きな差があることから知られよう。そしてこの相違こそがわれわれが問題としている人間精神の歴史性 (historicity) を明らかにするものなのである。

一方、バルビュエの歴史心理学理論における [insecurity→security] の心理的プロセスをはじめ、あるいはそこに見られるさまざまな心的機制 (転位 displacement, 退行, 補償など) は普遍概念によって構成されている。それは1830年のリヨンの絹織物業労働者の暴動に見られる集団的情動の転位を説明するためだけではなく、その他の時代の社会心理現象についても説明を与えるためのシエーマなのである。しかも集団心理のこのようなメカニズム自体は精神分析概念に依っている。もしバルビュエが精神分析理論における諸概念あるいは方法論一般を非歴史的と呼ぶならば (勿論彼はエディプス・コンプレックスの普遍性を問題にしている)、彼のシエーマもまた非歴史的であると言わざるを得ない。バルビュエの言葉通り、もし純粋理論の普遍的妥当概念を極端に否定するのであれば、歴史性を払拭した従来の心理学の純粋理論的概念を用いて歴史心理学を構築しようとする事自体が、理論的には問題とされなくてはならなくなる。それはまさしくメイエルソンの試みにうかがえるように、現代心理学のもつ多くの既成概念と理論的道具を捨て去った後、人間の精神への接近を企てねばならないことを意味する。

バルビュエのように精神分析学や社会学から種々の概念を借りてくる場合、どのような概念をどのように採用するかも問題となる。たとえば、ナショナリ

1 Z. Barbu, *op. cit.*, p. 48.

ズムの社会心理的分析，考察が要請されたと仮定しよう。バルビュールならこれを集合的情動性，情動的風土により形成されるものとし（その逆も考える），そのうちに特定の時代のナショナリズムの心理的起源つまり心理歴史的焦点を探求し分析する方法をとるかもしれない。その際には転位，補償，退行などのメカニズムを用いて説明するであろう。しかしこの場合，ナショナリズムやナショナル・キャラクターの形態や性格を規定するものとして，たとえばその集団の成員による集団への identification，そこにおける identity などが重要な役割を演ずることは多くの研究が示しているところである。しかるにバルビュールにおいては identification, identity などの概念は初めから導入されておらず，問題とされてもいないのである。

要するに私がここで問題としているのは，バルビュールが精神分析的概念のうち若干の特定の概念を採用し，他の重要な概念を不採用する理論的根拠が必ずしも明確にされていないので，従って彼の用いる心理的諸概念は，彼が事例に応じて恣意的に選定したにすぎないとの印象を与えるということである。

バルビュールの事例研究の方法における基本問題の第二は，彼が還元主義に陥るのを恐れるあまり，観察や事例データの集積・整理により，因果関係を発見し，普遍妥当的法則やそのダイナミズムを解明し，そこから純理論的モデル（数学的モデルから理念型まですべてを含めて）を構想する方法に対し否定的な姿勢を取る結果，かえってバルビュールの行おうとすることは歴史心理の記述と解釈となり，了解心理学的なものに終る危険があることである。

たとえば，バルビュールが自分の考えを最も明確に示すことができたと言張する英国人の国民性を扱った部分（第V，IV章）においても，彼が行なったのは，結局のところ，ある国民，民族のパーソナリティ構造の特定の諸特性が特定の歴史過程の諸事象と何らかの関係があり，その心理的要因の相互連関を精神分析的概念を用いることによって説明ができ，解釈ができることを示したにすぎない。つまり，彼は近代英国人の国民性のうちほんのわずかの特定の心理的特性を恣意的にピックアップしてきて，それらの歴史的起源即ち心理—歴史的状況の焦点をさぐり出してくる。しかしそれは彼自身も認めるように，英国社会

2. バルビュールの歴史心理学

の特殊な心理—歴史的条件にまでさかのぼることのできるような少数の特性に他ならない。さらにこの若干の特性を選んでくる時に既に、その歴史的起源なりが主観的に想定されている可能性が多分にある。つまりこれは研究主体の主観によってふるいにかけてしまっている恐れがあるのである。従ってその理論的妥当性、客観性がどこまで保証されているかが常に問題となるであろう。またバルビュールも認めるように、英国民の特定の時代の精神構造さえ包括的に把握する作業が全くなされていない。これも重大な弱点と言わねばならないところである。

バルビュールの方法的問題のもう一つは、第二点として述べた点と表裏をなす問題である。それはバルビュールが随所に行う普遍的理論構築の批判に関してである。私は、人間の精神現象を水平的及び垂直的視座をもって巨視的にこれを探究し、歴史と社会・文化と人間精神の相互連関のダイナミズムを明らかにすることによって、そこに潜む構造的特質を把握することに歴史心理学の課題の一つがあると思う。従って、歴史心理学においては、人間精神のうちにある歴史性 (historicity) を解明することと同時にその普遍性をさぐり、これを法則化し、体系化する努力がなされなければならない。それは歴史学においてとられる方法と同じような意味で認められねばならない。歴史性 (historicity) を把握するということは、一回限りの現象としての歴史的事象のもつ特殊性と同時に、その普遍性をも把握することを前提とする。現象はその特殊性と普遍性が渾然一体を成すものである。この両契機をともにとらえずして、歴史のダイナミズムをとらえることは不可能であるし、また歴史と心理のからみ合を単なる記述から理論化することはできない。問題は神島も指摘するように次の点にある。

「その具っているもののなかからなにをとり出し、なにに普遍性をみとめ、¹
なにによってくみたてるかにある。」

バルビュールに欠けているのはこうした視点である。それは彼の歴史心理学の問題設定、及びその方法論の理論的水準から必然的に出てくる弱点であること

1 神島二郎, *op. cit.*, p. 10.

は、以上述べてきたことから明らかである。

最後に、バルビュールの方法論の示唆する重要な意味を一つだけ挙げておきたい。バルビュールは人間の心理現象一般に具わる普遍性を抽出し、これをモデル化することを徹底的にフィクシズムとして排する。彼はこれを次のように言う。

「人間精神の普遍的モデルを構築せんとするあらゆる試みの中に『フィクシズム』の精神が顕著にあらわれる。」¹

このバルビュールの方法的批判はどのような意味をもつことになるのだろうか。ただ一つはっきりしていることは、この態度をあまりに極端に進めていくと、当然これは「行動科学批判」にもつながるということである。なぜなら、人間行動の普遍的モデル構築の精神が最もよく体现されているのはまさに現代行動科学であり、これは人間行動のみならず心理活動一般に対しても発言しようとしているからである。² そうした試みこそバルビュールが再三糾弾するものに他ならない。このことをつきつめれば、さらに行動科学のみならず、サイバネティックス、情報科学一般に対する批判につながることに注意しなければならない。

また科学哲学的観点から見れば、これは行動科学方法論を支える論理実証主義、操作主義、プラグマティズム批判につながる意味をもつものであることを指摘しておきたい。

以上のようなさまざまな理論的、方法的問題を多く抱えているにもかかわらず、バルビュールの成した業績は大きいと言わねばならない。その情動的風土理論、あるいは「心理—社会サイクル」による螺旋形的発展運動の概念などに見るべきものがある。それにもまして大きな意義は、彼がメイエルソンなどととも「歴史心理学」の第一歩をこれによって記したことである。³

(筆者の住所：東京都練馬区関町 6-456 〒 177)

1 Z. Barbu, *op. cit.*, p. 14.

2 坂本百大「新人間機械論」『岩波講座 哲学Ⅲ—人間の哲学』(岩波書店, 1968), pp. 143-168. 吉村融「二十世紀の人間論の成立条件」同上書, pp. 99-142.

3 本稿を執筆するに際し、長くメイエルソン研究を行なっている真田孝昭氏から多くの示唆を得た。記して厚く感謝の意を表します。